

## ヨハネの手紙第一

### §3 3つの検証の詳論(3:1-4:6)[その1]

#### §2 の復習

救いに関する3つの検証が語られた。

1. 道徳的検証：人は神の御言葉を守ることによって、救われていることが証明される。
2. 社会的検証：人は兄弟を愛することによって、救われていることが証明される。
3. 神学的検証：人はイエスを神の子として信じていることによって、救われていることが証明される。

以上の1. ~3. のどれも人の側に責任があることだが、神の助けがなければできないことである。

#### §3 3つの検証の詳論(3:1-4:6)[その1]

##### 1. 道徳的検証: 義の実践(3:1-10)

##### 1-1. 再臨の希望と義の実践(3:1-3)

はじめに

1. 再臨の希望と義の実践の繋がりは、2:28-29でも教えられていた。
  - (1) 「キリストのうちにとどまる」のは、「キリストが現れるとき、私たちが信頼を持ち、その来臨のときに、御前で恥じ入ることのないため」であった。
  - (2) これは、御子への信仰があるからこそ救いの証拠である、という文脈で語られたことであった。
2. 3:1-10では、ヨハネは再び「道徳的検証」に戻っていく。
  - (1) 「道徳的検証」とは、「神のことばを守っているからこそ救いの証拠である」ということの検証であった。
  - (2) 3:1-10での「道徳的検証」のテーマは「義の実践」である。
  - (3) ヨハネは「義の実践」を語っていくイントロダクションとして、再臨の希望と義の実践の繋がりを再び強調している。

3:1 私たちが神の子どもと呼ばれるために、——事実、いま私たちは神の子どもです——御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょう。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。

1. 2:28-29 で再臨の希望を語った後、ヨハネは「見よ、神の愛はなんという愛だろう」と読者に呼びかけている。

(1) 基本的にギリシャ語の文章では語順から著者の強調点がわかる。

(2) ギリシャ語原文では、冒頭に来る言葉は *idete* (見よ) である。

(3) ほとんどの英語訳が原文に近い語順を示している。

English Standard Version: *See what kind of love the Father has given to us, that we should be called children of God; and so we are.* (見よ、御父が私たちに与えてくださった愛は、なんという愛だろう。それにより私たちは神の子と呼ばれるほどであり、事実、私たちはその通りである。)

(4) ヨハネの強調点は、御父が与えてくださった愛に置かれている。

(5) 「**与えてくださった** *dedōken*」という動詞は「寄付行為」を表している<sup>1</sup>。

(6) 父なる神が与えてくださった愛は、それを受けるに値しない私たちに与えられた「驚くばかりの恵み」である。

2. 神の愛により、私たちは神の子となった。

(1) 「**神の子** *tekna theou*」とは「神から生まれた者」という意味である<sup>2</sup>。

(2) 2:29 では「義を行う者」＝「神から生まれた者」であった。よって、「神の子」とは「義を行う者」でもある。

(3) ヨハネは自分自身と（おそらくは）読者たちも含めて「私たちは神の子どもです」と言っている。

(4) 私たちが中身は罪人のままであるにもかかわらず、神は私たちに「わたしたちが神の子と呼ばれるほど」の愛を与えてくださった（新共同訳）。

(5) この神の愛についての驚きは、聖書研究をする者にとって常に新鮮であり続ける。

3. 私たちが義を行う者とされたことは、一方的な神の恵みによる。

(1) 私たちは神の愛により、「**神の子どもとされる特権**」を与えられた。

ヨハ 1:12 **しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子**

<sup>1</sup> See commentary on I John 3:1 by M. R. Vincent, *Word Studies in the New Testament*, in PC software e-Sword X.

<sup>2</sup> ジョン・R・W・ストット『ティンデル聖書注解 ヨハネの手紙』千田俊昭訳（いのちのことば社、2007年）132頁参照。

もとされる特権をお与えになった。

(ロマ 8:14-17 ; ガラ 4:4-6 も参照のこと。)

- (2) 私たちが義であるイエス・キリストを信じることによって、神は私たちを「義を行う者」とみなしてくださいました。その信仰自体が「神からの賜物」である (エペ 2:8)。

ロマ 4:24b **すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。**

ロマ 4:25 **主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。**

- (3) (2)の教えを「**信仰義認**」という。信仰義認の土台は「**キリストの血**」である (ロマ 5:9)。  
(4) キリストが神の怒りの「**なだめの供え物**」として犠牲になられたことが土台となって、私たちは義と認められた (Iヨハ 2:2 参照)。  
(5) 罪の故に神の敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられた (ロマ 5:10)。さらに、私たちは神の養子とされたのである。

4. 神から愛を与えられ、神の子とされた私たちは、「**世**」とは相容れない存在である。

- (1) 「**世**」とは、「サタンの支配下にある世界の秩序」のことであった<sup>3</sup>。  
(2) 世が私たちも神も「知らない」という言葉では、いずれも体験的理解を意味する *ginōskō* が用いられている。  
(3) 世は御父を (体験的に) 理解しなかった。だから、御父の子である信者は世から理解されていないのである。

ヨハ 15:18 **もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。**

- (4) この手紙の読者たちは、世に属する偽教師たちによって苦しめられていた。そのような世との葛藤による苦しみを味わうことは、「神の子」である信者にとって当然のことなのである。

**3:2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。**

1. 世においては、信者は理解されないからこそ苦難に遭う。しかし、その中で私たちは「**今**

<sup>3</sup> テキスト「§2 救いに関する3つの検証 (2:3-29) [その2]」4-5頁参照。

すでに神の子ども」であるということを忘れてはならない。

2. 私たちはすでに神の子であり、キリストの再臨のとき、「キリストに似た者」となる。

(1) ヨハネが正直に認めているように、私たちが後にどのような状態になるか、詳しいことは分からない。しかし、キリストが再臨される時「キリストに似た者」になるということは分かっている。

(2) キリストが再臨される時、私たちは主のもとへ集められる。

Iテサ 4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、

Iテサ 4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

(3) 私たちが主のもとへ集められる時、私たちは変えられる。

Iコリ 15:50 兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

Iコリ 15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。

Iコリ 15:52 終わりのラツパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラツパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

(4) 私たちが「朽ちないもの」に変えられるとは、「主と同じかたち」に変えられるということである。

IIコリ 3:18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

(5) このことは、私たちが神から選ばれた段階で既に定められていたことである（ロマ 8:29）。そして、私たちは実際にそれが起こる再臨のときを待ち望んでいる。

ロマ 8:23 そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。

ロマ 8:24 私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。

ロマ 8:25 もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。

### 3.3 キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

1. 世は滅び去るが、信者には再臨という圧倒的な希望がある（ロマ 8:18 参照）。
2. 信者は再臨の希望を持っているからこそ、神のことばを守る。
  - (1) 再臨の希望は、救われた信者だからこそ持っているものである。
  - (2) キリストが清くあられるように自分を清くする者（神のことばを守る者）は、再臨の希望を持っている者である。
  - (3) よって、神のことばを守る者は救われている、という**道徳的検証**が成立する。
3. 再臨の希望と義の実践
  - (1) 既に神から生まれた者であるという確信があるからこそ、私たちは地上を歩んでいる今このときからイエスのように清くありたいと願うようになる。
  - (2) 「清い」という表現は、この世から分けられている（聖別されている）ことを示している<sup>4</sup>。
  - (3) 信者は新しく生まれたとき、聖霊を注がれ、聖別された。
  - (4) 信者は「今すでに神の子である」また「いつの日かありのままのイエス・キリストの御前に立つ」という信仰から、自発的に清くありたい、あり続けたいと願うようになる。
  - (5) 注がれている聖霊によって、それを実践していく力も与えられる。
  - (6) 信者は聖霊によって心も清め変えられていきながら、「清くあり続けたい／聖霊によって清くあり続けることができる」という神への信頼と共に歩もうとするのである。

## まとめ

1. 私たちは本来受けるに値しない神の愛を与えられ、神の子とされた。
2. 神の子である私たちは、キリストが再臨される時、キリストに似た者に変えられる。
3. 神の愛の素晴らしさ、キリストのありのままの姿を見ることになるという希望から、私たちは清く歩みたいと願い、それを実践していくことになる。

---

<sup>4</sup> キリストが「清い」という表現には形容詞 *hagnos* が用いられており、信者自身を「清く」するという表現にはその動詞形である *hagnizō* が用いられている。前者の形容詞は、イエス時代以前に登場した旧約聖書のヘブライ語訳である七十人訳聖書において、儀式的清めに対して用いられている（出 19:10 など）。また、新約聖書の多くの箇所でも儀式的清めに関連して用いられている（ヨハ 11:55；使 21:24、26；24:18）。儀式的清め（聖別）は、この世から分けられていることを示している。